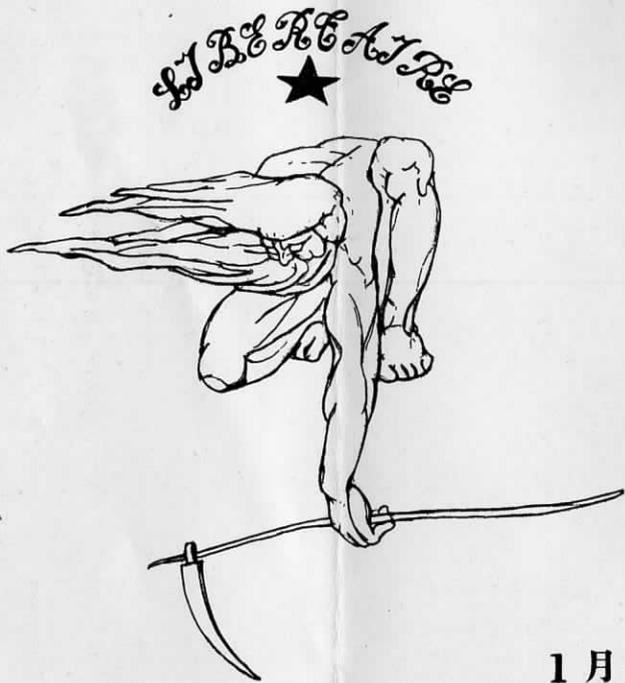


リベルテール



1月号

Le Libertaire VoL, III, No 2

無政府主義者の機関誌

昭和四十五年九月 四日才三種郵便物認可
昭和四十七年一月十五日発行才二十六号

定価一〇〇円（送料共）

目次

民衆の中へ	小野原 降雪	1
アナキズムと二つの雲	大塚 新	2
大沢国家論への質問	西塔 昌弘	5
たそがれ日記	山鹿 泰治	9
アンケートの中から		10
カプーターズ		12
野火		16

民衆の中へ

小野原 降雪

『アナキストは、一つの場所に執着してはいけない！』

アナキストがアナキストたらしめることは、絶えず行動することだろう。自由を希求し、万人の安楽を考えることは、行動なしには語れない問題だ。家庭に居座り、家族の一員として社会を案じる人が、どこに革命の情熱を伝達することがあるだろう。より多くの人に思想を伝え、より多くの人の理解がなくては革命は起こらないだろう。

現在のアナキズム運動は、これを逸脱している面が多分にある。このことに危惧を抱かない人達は、アナキズムをマルキズムの方法で、つまり理論化を頭脳集団の仕事とし、活動をサークル化しようとしている。

これは、戦後アナ連等によってアナキズム運動をサロン化して来たことに、大きな責任があるだろう。少なくともアナキストたらしめることなく、又アナキストらしくもない人間がアナキズムを語ることで、運動の大部分になってしまったことが、結局私人主義的な主張を生み、育てることにもなったのだろう。

アナキズム運動は、絶えず民衆にその思想を伝え、革命を説くことなくしてはもはや何の意味もないのではなからうか？革命の機運は、そのバロメーターとなって現われるだろう。民衆なくしてアナキズムを語ることは無意味である。と同時に、民衆と共にアナキズム運動は考えられない。民衆を味方ともなるともしないアナキズムは、図書館にでもおさまっている方がいいのである。

例示的な大衆運動に対応し、革命の必要を説き、民衆の中に入って行くことによって、アナキストであることを真に社会に知らせることができようである。

(大阪から)

アナキズムが現代の革命原理として再生することを阻む、二つの雲がおおっている。ひとつは行動理論の現在の状況からの立ちおくれであり、もうひとつは総合体系的な性格を持っていたアナキズムの旧式化という雲である。その二つの雲は重なりあって空にかけりをおとし、見えるものと見えないものとの区別を曖昧にしてしまっている。

現代資本主義はあらゆる技術科学を折衷して取り入れるうちに、すべてを旧式にしまった。その恐るべき柔軟さで、科学を資本主義体制に組みこむことによっておとしめ、骨のない軟体動物に変えてしまった。技術は生産の効率という資本の価値にのめりこみ、人間の地位を下落させ、その究極として人間工学として結晶し、一切が資本主義の論理、支配の論理のなかで窒息しようとしている。それは人間と社会の分解であり、再合成であった。そこには矛盾なく、合理的な支配のメカニズムによって組み立てられた巨大な機械となって眼の前をおおっている。もはやガリレオは存在しない。彼は十分に満足しており、黙々と研究にはげんでおり、何もくよくよ

考える必要はない。

資本主義の論理に反対するものは、科学と進歩のユートピアに反対する落伍者のようにさえ見える。その幻想は、都市問題、自然破壊、人間破壊というみごとなカウンター・パンチによってマットに沈められたかのように見えるけれども、おそらく不死鳥のように再び力をとりもどすであろう。公害反対運動や種々の市民運動に集約されたダメージも、技術のレベルで徐々に解決されるか、もしくは解決されたとの幻想が広められるうちに、回復し、より強固な姿で立ちあがるだろう。それは突破口のように見えたとしても、袋小路であることを知らなければならぬ。生産制の論理は、資本主義の成熟に伴い、より普遍的な原則となるには遅いけれども、人間と社会の管理の属性が技術的に深化することにより、より安定した基礎を獲得し続けるであろう。

人間はすでに過去におけるような「人間的な」という形容にあらわされる存在ではなく、人間工学における人間機械論の人間なのだ。そして、あらゆる人間がそのメカニズムのなかで再生産されていくのである。資本主

義の遅れた側面は、道徳とか宗教とかで補足されているけれども、それさえもいつか掃されるだろう。

アナキズムの上にただようオ一の雲は、過去の眼で現在を見ることができないのに、新しい視点を獲得することができず、今だ立ち止まっていることに起因している。

十八・九世紀の民衆の運動が革命思想と相互作用的な働きでもって、理論と行動に豊富に栄養を与えて来たのが、現在ではそのころの結実に固定したことによって、現在の民衆の自然発生的運動とそこにひそむものを見ることのできななくなっていることにあるのだ。例えば全共闘運動というひとつの契機のなかで、アナキズムにつながっていく者はあっても、運動が政治主義にねじまげられていくこと、あるいは、彼らがなぜ立ちあがったかという現在の課題に注視することができなかった。過去と現在のの飢餓の質の相違に眼を向けることをしなかった。現在の苦しみを把握することができなかったのである。いかにライヒを、誰々をありがたがっても、それが、現実にとびこんだ上でなされなければ砂上の楼閣で、波のひとつでくずれ去ってしまうだろう。

オ二の雲は、過去のアナキズムの精神を忘れて、理論の固定化と適用に終始したことにある。アナキズム理論を絶対視しない、権威視しない、と言いつつ、例えば、

クロボトキンが貪欲に近代科学にせまった精神を忘れて結論の定式化を追ったことにある。クロボトキンのあくなき貪欲さはどこにいったのか。すべてに対してせまり自己の掌中にとらえようとする気迫はどこへいったしまったのだ。

過去の理論に対する態度は常に限界点を持って接しなければならぬ。証明している事柄は、証明の基盤となっている要素、証明の方法の有効性を、新しい事実と方法論でもって検証する必要がある。それは思想で弁論するのであってはならない。同時に、結論を得たとしても自己の存在の限界性の観点から、可変的にとらえなければならぬ。アナキズムの理論は、個人の自由を追求する理論だが、常にコミュニケートを媒介とした革命の理論である。それゆえに、いくら実存を語っても他人とか事物との関係のうちにか自己を語らず、例え頭のなかで実存を直観できたとしても言葉になつた時すでに関係に収束するのだと知らなければならぬ。そうした限界を認識することによってしか、一切が唯やみくもな意味のないものになってしまう。循環論法になるが、それだからこそ言語学、心理学、一切の科学による認識論的歯止めを持つ必要があるのである。書かれたものにはすべてその限界にそっている。無意識のうちにもそれを持た

ない限り、あるダイストが詩の作りかたとしてバラバラに切り離れた単語を箱に入れてかきまぜ、でたらめに並べるといふ方法を提起したが、そんなふうにコミュニケーションを無視したところにしか存在できないだろう。

自分がどこに立っていて、一体どこにいかうとするのかということさえわからない。自分のいる場所がわからないのに、どこかに到着したとしてもどれだけ意味があるのだろうか。疲労によるこちよい満足感はあってもはたして他人に何かを語りうる資格があるのだろうか。

二つの雲は、おそらく現代資本主義とそこに組み込まれている自己との関係、自己の存在の様式を認識することができないために発生したものであろう。精神を語りつつ、精神の限界を知らないと同様に。精神分析を語るにしても、精神分析を社会理論に折衷して、革命者じしんをいかに歪めているかという視点を欠いたら、そんなものは形而上学になってしまう。あるいは、正常・異常の問題をどこで分岐するかも現在時による把握は有効でなく、人類学的アプローチ等によりおこなわれないと、現在のように資本の理論による、仕事ができないとか反抗とかの、生産制とか体制のレベルでの価値基準におさまってしまうのである。

この危機的状況のなかで、アナキズムは再びその地位

大沢国家論への質問

西塔 昌弘

大沢国家論の現在の集大成といえる「国家―権力による組織の最高型態」は7つの章からなっていて、このうち、1・2は大沢さんの表現で言えば「レーニン国家論の一面性を克服しよう」と努めている一群の現代マルクス主義者たち」のうちの「機能的国家論」批判、3は「幻想国家論」批判、4・5はブーバーの「われ―なんじ」の「われ―それ」による国家・権力の歴史的な形成過程の分析、6はその原理的分析、7は権力の体系化の分析、がその内容といえる。そこで、まずオ6章から大沢さんへの質問を始めたいと思います。

1. そこで使用されているモデルの一要素として、大沢さんは「自然的、歴史的、社会的諸関係のアンサンブル（以後、Rと記す）」なる概念を使用していますが、その妥当性がまず問題です。大沢さんはそのRからさらに、 $函体A= R-A$ 、 $函体B= R-B$ （正式には、 $函体A= f(R-A)$ 、 $函体B= f(R-B)$ 、 f でしよ）なる式が得られるとして、その式から「個体A・個体B……の質および量がそれぞれ、個体の数だけ相異なるのはそれぞれの個体がそれぞれに、すべての自然的、

を復権していかねばならないだろう。それは資本主義と新しい権力主義のために失いつつある人間の復活を求めて。人間の結びつきは貧しく、精神はがんじがらめ、新聞記事にくりかえされるような漫性的欲求不満と自己破壊におちいつている。国家による抑圧、夫による抑圧から妻は子供に復讐する。つまらない殺人、暴行、事故等々、すべてそれだ。マルキストの内ゲバは資本主義と権力主義の論理の転化だ。

不可知な懐疑的な状況、だからこそアナキズムは新展開をはからなければならぬ。しかし、アナキズムは理想や単なる思想ではなく、現実の社会変革の理論なのだ。そのためには認識論の問題から、自己と人間と自然と社会の認識をより深化しなければならぬのである。自然科学も社会科学もアナキズムを動揺させるものではなくすべてが人間に自由を約束するものとして受容する必要がある。アナキズムは科学の成果を充分にその限界を認め、相対的なりけとめかたで貪欲にとりいれなければならぬ。クロボトキンの精神をわがものとして、アナキズムの精神に現代科学の肉体を持たせなければならぬ。そこに調和と、現在の基盤がある。現在のなすべの事柄は、その肉体を持ってのみ感得することが可能となるであろう。

歴史的、社会的アンサンブルだからである」という命題が演繹されるといっています。しかし、その結論は初歩的な論理学の約束を破っているのではないのでしょうか。論理学では、証明にその証明すべき命題を使用できないことになっているのですが、 $函体A= R-A$ 、 $函体B= R-B$ から $A+B$ を導びき出すには、その証明に、証明されるべき $A+B$ なる命題を使用しなければならぬのではないかとこのことです。

2. もしそうだとすれば、このようなRという概念からは個の唯一性は導びき出せないということになりますしそのような概念による国家・権力の分析の妥当性への疑問です。

3. おそらく大沢さんはそこで個というものが社会に含まれて考えられる、ということを書いたのだと思いますが、依然、大沢国家論においては社会と個というものが分離したままにあるということであり、そこで大沢さんは国家に対するものとして社会をあげていますが、繰り返し尋ねれば、国家に対するものは社会なのでしょうか、個なのでしょうか。

4. 次に、自己生命力の渦巻運動の問題ですが、それを図式化すると、共同体に属する諸関係のアンサンブルの量を r_1 、利用体に属する諸関係のアンサンブルの量を

を R_2 とするなら、 $R_1 \wedge R_2$ のとき $A \rightarrow B$ を1とする
 $R \rightarrow A'$ は $1 + X'$ 、 $R_1 \vee R_2$ のとき $R \rightarrow A'$ は
 $1 - X$ となり、そして、その関係を見る限り、それぞ
れのアンサンブルに自己生命II力を増大、あるいは減少
させる力があるとみることができます。そのことから、
 $X_1 = [r_1 - r_2]$ とおくことができるでしょう。ここで
 $1 + X$ となって個体に戻ってきた自己生命II力が再び
 R へ流出していくとき、それが R をどのように変化させ
るのか、大沢さんは明確には述べていないのですが、大
沢さんのニュアンスからいって、 $1 + X$ のときは r_1 の
増大、 $1 - X$ のときは r_2 の増大ととることができる
と思います。もしそうすると、自己生命II力の渦巻運動は
 $r_1 \vee r_2$ のときは、 $A \rightarrow B$ を1として $R \rightarrow A' \rightarrow B'$
を X' 、 $R' \rightarrow A'' \rightarrow B''$ を X'' とすると、 $X_1 = 1 + X$ 、 X_2
 $\vee 1 + 2X$ 、 \dots 、 $X_0 \vee 1 + 2X$ となって、自己生命II
力は無限に増大していき、 $r_1 \vee r_2$ のときは $X_1 = 1 -$
 X 、 $X_2 = 1 - 2X$ 、 \dots 、 $X_0 = 1 - 2X$ となって、自己
生命II力は無限に減少していきます。そして大沢さんは
「 \wedge 」のとき権力が確立されると言っているのですか
ら、大沢国家論からいえば、一たび権力が確立すれば、
永遠に権力は消滅しないことになってしまいます。とす
れば、大沢さんが現代マルクス主義者を批判すると同じ

もしそうだとすれば、人間はそれだけ他の人間に依存し
なくてもよくなったといえます。すなわち、大沢さんは
群居生活にも相互依存を認めているけれど、この群居生
活的相互依存は人間が直立することによって減少してい
たとみることができているのではないのでしょうか。しかし、
大沢さんは「共同体あるいは社会が発展するにもなっ
て、そこでの相互依存の関係はしだいに多様化し、複雑
になっていった」と言っているのだから、それは群居生
活的な相互依存とは別個の、新しい相互依存関係が生じ
それが増大していったということではないのでしょうか。
そしてこの群居生活的な依存関係の減少と、それとは別
個の依存関係の発生という新たな相互依存関係が、根源
語 \wedge われーそれ \vee を発生させたのではないのでしょうか。
そして類の一体感情が群居生活における相互関係を維持
していたように、この新しい相互依存関係を維持させる
ために \wedge われーなんじ \vee という根源語が創造されたので
はないのでしょうか。もしそうだとすれば、自己意識 \downarrow \wedge
われーなんじ \vee \downarrow \wedge われーそれ \vee ではなく、自己意識 \downarrow \wedge
 \wedge われーそれ \vee \downarrow \wedge われーなんじ \vee ということになりま
す。

6 次の疑問は、個と共同体、利用体の関係です。大
沢さんは「利用体の核である \wedge われーそれ \vee は、それ自

ように、大沢国家論もまた数千年にわたる権力の存在と
その永遠の存続の合理化以外の何ものでもないというこ
とになるのではないのでしょうか。

次に才5章ですが、ここは大沢国家論においてもっと
も重要な部分と言え、そこにおける論旨は、だいたい次
のようになる。群居生活 \downarrow 人間の直立 \downarrow 自己意識の発生
 \downarrow それによる群居生活の崩壊 \downarrow 才一の危機 \downarrow 根源語 \wedge わ
れーなんじ \vee の創造による危機の突破 \downarrow 相互依存の増大
 \downarrow 根源語 \wedge われーそれ \vee の発生 \downarrow 利用体の形成 \downarrow その増
大 \downarrow 才二の危機 \downarrow 権力の発生。

5 ここですら疑問となるのは、大沢さんは自己意識
 \downarrow \wedge われーなんじ \vee \downarrow \wedge われーそれ \vee という順序をとっ
ているけれど、自己意識 \downarrow \wedge われーそれ \vee \downarrow \wedge われーな
んじ \vee という順になるのではないかということ。大
沢さんは個体に対しては自己意識の発生のみをあげてい
るだけだけれど、単にそれだけではなく、それ以前の
個の強力化ということがあるのではないのでしょうか。も
しそうだとすれば、「共同体あるいは社会は、人類前時
代の群居生活のとき以上に、相互に依存する度を増大
させていく」と大沢さんは言うのだけれど、かならずし
もそうは言えなくなります。棍棒を持った人間は、それ
までの自分よりも強大になったのではないのでしょうか。

体、凝集力とは反対に働く力、すなわち分解力でしかな
い」というとき、その表現は不十分であって、正確に言
うなら、 \wedge われーそれ \vee の、すなわち利用体の中におか
れた個が分解力なのであって、利用体は、その個によっ
て分解される対象ではないのではないのでしょうか。大
沢さんの言葉でいえば「利用されまいとする意志」は、
当然、利用関係を破壊しようとするのではないかという
ことです。そこにおいて、自己意識は依存関係から脱出
しようとし、利用体は、個を依存関係の中に押し止めよ
うとし、対立が生じると考えられます。

7 では、そこにおける共同体の立場は何でしょう
か。「人間は、 \wedge われーなんじ \vee という超意識を核とする共
同体あるいは社会を形成していくことを通じて、はじめ
て人間としての存在を確保することができる。また、そ
れによって、人間は、人間としての生命を保持すること
ができる。しかし、同時に、人間は、そのことを通じて
ますます、たがいに依存しあい、利用しあう網の目のな
かにかんじがらめに組みこまれていく」と大沢さんは言
っています。とするなら、共同体、あるいは \wedge われーな
んじ \vee もまた、個を利用体の中に押し止めておこうとす
る一つの力ではないのでしょうか。

8 最後に権力に関する疑問です。権力に関して「利

用体がしだいに発展し、それ自体、一つの世界を成していくに従って、この均衡と調和は破れ、利用体による共同体の侵蝕、破壊という状況が出現する。共同体から自らを切りはなし、共同体と適対するものとして自己を形成していくとき、利用体は、共同体とは別の、集団の凝集力を生みださなくてはならない。……それゆえ、利用体が共同体とは別の、独立した世界を形成し、それを保持していくためには、△われーそれVの根源語に基づきかつそれに付加されるべきなんらかの凝集力が必須になる。それが権力にほかならない」と大沢さんは言われます。しかし共同体を破壊するのは自己意識なのか利用体なのでしょうか。それとも他の何かなのでしょうか。

9 また、大沢さんの文面を見る限り、利用体の凝集力としての権力、と読みとれるのですが、もしそう言うなら、共同体と利用体が共に存在し、共同体が利用体を包み込むことができなくなった社会、すなわち利用体社会とでもいべき社会の凝集力としての権力と言いなおすべきではないでしょうか。

10 才三章に行くまえに、才4章に立ちどまるなら、人間はのべつまくなしに話し続けているものなのか。「なんじ」と話しかける「われ」、「それ」と話しかける「われ」の他に、何も話しかけない「われ」もいるのでは

ないでしょうか。

次に、大沢さんの「幻想国家論」批判、特に吉本批判を検討してみることがあります。

11 「根源語△われーなんじVという超意識こそ、宗教の起源である」「宗教は吉本隆明が主張しているように、国家の起源ではなく、むしろ共同体あるいは社会を形成していく上に不可欠の核なのである」と大沢さんは吉本を批判している。しかし、さきほどみたように△われーなんじVこそ、その超意識によって個を利用体の中に押し止める一つの力だとするならば、国家・権力を△われーそれVの中にだけ見る大沢さんよりも、「原始宗教から法・国家への発展」を見る吉本の方が、大沢国家論からの帰結として正当性を有しているのではないでしょうか。

12 もし大沢さんのように国家を△われーそれVにみるならば、大沢さんも認めている国家の「幻想的な共同性」をどこから引っぱり出しているのでしょうか。利用体には、大沢さんに言わせれば何らの共同性もないのであり、そこから、幻想ではあれ、どのような共同性も生じてこないと思うのですが。

たそがれ日記

山鹿 泰治

和田英と延島英一

二人はコンビで機関紙の編集や毎日の争議にもよく働いた。延島は勉強家で独習の英語も上手だった。私の発案で近くシナの広東で汎太平洋会議が開かれるのに対し自連も割り込む方がよいと思った。自連大会で代表を送る件が可決された。その時スパイはうっかり聞き流したらしく、何の手当もしなかったので、私は選ばれた自由労組の歌川伸、黒連の松本親敏、武良二君らと旅費つくり努力した。私の大切にしていた幸徳の肉筆の短冊を売ったりして一九二七年（昭和二年）春、一行はひそかに出発した。

中国总工会が準備が悪く、広東まで着いたら急に漢口で開くことに変更された。中国の責任で旅費は負担してくれて上海を通って漢口へ行った。ロシアが主力で中国、インド、朝鮮、イギリスからはトム・マンがきた。歌川君は英語がうまく、トム・マンとも親しく話したそうである。ロンドンへ来たなら立ち寄れと招かれたそうである。

この会議は共産党の司会だから、何もとり上げられないことはわかり切っていることで、サッコ・ヴァンゼツチ釈放要求と被圧民族の解放要求だけが共通の問題に

なっただけで、結局赤色帝国主義の支持に利用されただけだった。その「宣言」の文句にも賛成できなかった。自連の内部でもそれ以来アナーキズムとサンジカリズムの論争が盛んになった。私の動議の結末がこんな不首尾だったので、延島と和田英は私に責任をせまり、詰め腹を切らされた。

エスベラントの講習会も牽制されがちだった。もっとも先生の私はまだ充分に卒業していなかったたので、日本語の文法さえよくわからない連中に教えることは無理でもあった。最後までやり通したのは読売の文選工だった島津末二郎と芝浦の安井義雄だけだった。安井は楽譜のガリ版屋になった。島津はその庭の一隅を貸してくれ、千葉の中山に私はバラックを建てて住み込んだ。脳出血で動けなくなった私はここが死場所になりそうだ。彼は私の妻の妹と結婚して三男二女をあげた。

延島英一は自連が強制解体させられた後は、社会党議員の経済誌に筆をとり、原水禁運動にも参加したが、アナーキズムについては、将来はブルードンの人民銀行の方向に進み、労働者との結びつきは望みが薄いと見ているそうである。元來かれの唯物観が甚だドライで親交のあった和田久さんの死についても「死んでゆくものには用がない」といった態度であった。